

新帝國的な身体形成と大学生協的身体形成

全国大学生生活協同組合 会長理事 庄司興吉

はじめに

皆さん、こんにちは。大学生協連会長理事の庄司です。今日は京滋・奈良地域の理事長先生方がほとんどお集まりということです。そういう会で話をさせていただく機会をいただきまして、たいへん有り難うございます。

一昨日・昨日と、京滋・奈良、大阪・和歌山、神戸3地域合同の教職員セミナーがありました。そこでも話をさせていただく機会を与えていただきました。その時に使ったレジメが今日の資料の4ページ目から入っております。最初はこれでそのまま再度話をさせていただこうと思っていたのですが、教職員セミナーにご出席の先生もいらっしゃると思います。またそれ以上に、教職員セミナーは非常に有意義な会議でした。

私のあとにもう1人の講演者の江藤先生が話をしてくださり、それもたいへん興味ある話だったのですが、それ以上に、そのあとで3人のパネリストの方がそれぞれの問題提起をしてくださってそれをめぐる議論があり、それが非常に有意義で面白かったと思います。そこで、私の今日の話は、教職員セミナーで私がどういう話をしたのかということをも最初の4分の1くらいで簡単に要約させていただき、そのうえで、教職員セミナーで3人のパネリストの方が提起された問題を私の文脈に則して私なりに理解するとどういうことになるのか、そういう形の話をしていただきたいと思います。私の話をさらに具体化すると同時に展開するという形になりますので、一昨日私の話を聞いていただいた先生方をも決して退屈させないで済むと思います。そのつもりでお聞きいただきたいと思います。

できればもう少し私の話を整理してパワーポイントにできるとよかったです。準備の時間が十分に取れず、直前の何日かあるいは何時間かでいろいろと中身を固めさせていただきましたので、皆さんのお手元にあるワープロのレジメそのもので今回は失礼させていただきます。

1. ビジョンとアクションの背後仮説

前回講演「ビジョンとアクションプランの背後仮説」との関係

まず、一昨日の京阪神教職員セミナーで私がどういうことを話したのかということです。去年の暮、大学生協連の全国総会で採択されたビジョンとアクションプランについて、話をさせていただきました。ビジョンとアクションプランはこのような冊子にまとまっていますが、それを分かりやすく示した『レポート2007』もあればいいと思いましたので、今日はそれも資料としてつけていただいております。この『レポート2007』を前のものと継続してご覧になると、今回のものが抜本的に変わっていることをお分かりいただけると思います。今回のビジョンとアクションプランに合わせて全面的に構成や内容を変えたからです。私もこの作成に積極的に参加しました。

また、『ビジョンとアクションプラン』および『レポート2007』はそれぞれの英語ヴァ

ーションもあります。それらはかなり内容の豊富なものですが、それらを逐一英語に訳しています。大学生協の固有の意義をわれわれが自覚して活動を進めると同時に、国際的にも訴えていかななくてはならないのではないかと思ったからです。そういう意味で、『ビジョンとアクションプラン』や『レポート 2007』の英語版にも私は全面的に手を入れました。もし機会がありましたらぜひご覧いただいて、そちらのほうも、とくに学生諸君で英語を使うことに熱心な人たちと一緒に、外向けにも発信していただければと思います。

そのうえで、私が一昨日の教職員セミナーで申しあげた内容ですが、皆様のお手元の資料にその時に私が用いたレジュメがあります。それを全部細かく振り返っている時間はありませんので、その内容の概略を新しいレジュメの1の部分に収録させていただきました。2は「教育のカウンセリング化？」となっていますが、これは当日の1人のパネリストの問題提起にたいする私のレスポンスです。また、2ページ目の3「食の面から身体形成を革新する」は、もう1人の方の問題提起にたいする私のレスポンスです。さらに、3ページ目の4「チームづくりとしての協同を手がかりに」は、さらにもう1人の方の問題提起への私のレスポンスです。本日のお話は、そういう構成になっています。

世界観内存在としての人間と大きな物語の崩壊

ビジョンとアクションプランは私が副会長時代から作成委員会の委員長になっていたので、その原案をつくって皆さんに見ていただき、いろんなご意見をいただきながら最終的なものをつくり上げました。その時に当事者としてどういうことを考えていたのか。人間というのは、必ずしも自分のやっていることをすべて理解しているわけではありません。あとで振り返ってみるとそうだったのだと分かってくるいろいろなことがあります。そういう意味で、その背後にあった仮説をいわば自覚化するという形で、一昨日このような話をさせていただきました。

第1点は、人間は世界観内存在であるということです。ハイデッガーの世界内存在という言葉が有名ですが、それと事実上同じ意味です。われわれは世界に直接生きているのではなく、世界観のなかに生きている。つまり、われわれの身体が歴史的に蓄積してきた能力によって、われわれの世界を認識しながら同時につくり出しているのです。われわれの存在以前に世界があるわけではなく、われわれは存在すると同時に世界をつくり出しているのです。世界をつくり出しながらそのなかに存在する。これは20世紀から今世紀にいたる哲学の主要潮流がくり返し説いてきたことです。そういうことを一昨日はもっと詳しくお話しましたが、今日はこのくらいにさせていただきます。要するに、われわれは本来ビジョンとアクションプランを持って生きざるをえない動物であるということです。持たないと思っても実際には無意識のうちにそういうものを持って生きているのです。だから、持たないで生きていると思っているのはそのことに無自覚なだけであるということを知覚しなくてはなりません。

20世紀をつうじていわゆる大きな物語がつぎつぎに崩壊しました。第1はマルクス主義の大きな物語。それは、人類の歴史はこのように発展してきて、われわれの社会はこういう段階にあって、やがてこうなっていくのだということに基づいて、今こうするべきだということまで含めた主張で、非常に包括的な物語でした。もっとも力のある物語だったと思いますが、それが崩壊したのをはじめとして、それ以外にも、例えばファシズムのつ

くり出した物語もあったし、マルクス主義に対抗して、自由主義的資本主義の側がつくり出したいろいろな物語もありました。人民資本主義とか産業主義とか脱産業主義とかいう物語です。そういうものもほとんど崩壊してしまいましたので、何か大きな物語を持つのは非常に虚しいことなのだ、という気分がとくに若い人たちのあいだに広がっています。

そういう意味で、現代の若い人たちは非常にシニカルです。だから、われわれが説こうとするような世界観や世界認識、社会観や社会認識にたいしても非常に冷めた反応をします。それには良い面もありますが、よく考えてみると、そのこと自体 1980 年代以降に世界に広まってきている新自由主義がそうさせているのです。あるいは、われわれがそういう大きな物語とか世界観などに無関心であるということが、新自由主義にとっては非常に都合がいいのです。

電子情報市場化を基礎に新しい帝国が出現

その背後にグローバル化があって、どんどん進んできています。グローバル化とは、前のレジュメでは段階を踏んで説明をしたのですが、簡単には電子情報市場化だと私は思っています。米ソ冷戦終結後の市場経済の地球的規模への広がりが基調となり、そのうえにそれまで進展してきたマスメディアによる情報化が重なった。その結果、グローバルメディアという形で世界中がメディアのネットワークに包まれる。さらにコンピュータが普及して、それらがネットワーク化されてきた。これらが重なって、マスメディアとわれわれのパーソナルメディアとが緊密に結びついた形となり、コミュニケーションを不可欠とする人間——メディア人間などという言葉もありますが——、すなわちわれわれがコミュニケーション・メディアの塊ようになってきている。そうしたまま、グローバル化に曝されている。私はそれを電子情報市場化と呼ぶのですが、それを基礎に、ソフトウェア産業を軸として資本主義が息を吹き返してきたのです。

日本経済が調子に乗り過ぎてバブルに入り、それが弾けて呆然としている時に、アメリカを中心とした資本主義が息を吹き返しました。パソコンおよびマイクロコンピュータに主導された消費文化が再編されてきています。ミシユル・フーコー以後に世界に広がった言葉でいうと、独特のバイオポリティカルプロダクション、つまり生政治的生産が世界中に広がってきています。

食、衣、住、性、移動、コミュニケーションが、アメリカふう非常に簡便化されてきている。簡単にファーストフードで食事を取って、ビジネスはスーツスタイルで、日常生活はジーンズで過ごす。住まいはどこも同じように規格化されてきていて、移動しても簡単に適応できる。セックスも非常に自由化されてきている。車という交通手段の発達が大いなのですが、移動は非常に自由化されてきて皆が激しく動き回ります。さらに、コミュニケーション手段は、携帯に頼るメール発展のプロセスを見てもお分かりのように、非常に簡便化されてきていて子どもにまで普及している。

こういういろいろな消費文化の発展をつうじて、われわれの身体は非常に軽くなってきています。体重が軽いという意味ではありません。要するに、電子情報市場的な手段をつうじて行なわれる絶えまない働きかけ、あるいはコントロールに、簡単に操作されやすくなってきているのです。

それを前提に、人権と民主主義をインペリウムとする全世界的なシステムが形成されて

きている。軽い身体を支配する帝国のようなシステムで、これは 2000 年にマイケル・ハートとアントニオ・ネグリが『帝国』という本を出版して以来、非常に有名になった議論です。しかし私は、ただ帝国では、古代ローマ帝国の再現というような議論と混同されかねないので、せめて新帝国と呼ぶべきだと主張しています。その新帝国が出現して、われわれは、その支配のもとに意識していなくてもおかれているのです。

対抗のために協同の意味が高まり、大学生協の役割が重大になっている

そのなかで、新帝国に対抗するために、協同の意味が高まってきている。だから、協同をもう一度考え直して再生し、再興していく必要があるのです。

19世紀は生産の世紀でしたから、生産の現場で資本に対抗する労働組合が非常に発達し、重要な意味を持ちました。20世紀は、それに加えて消費の比重が高まり、消費社会の世紀でもありました。したがって、消費者の協同、協同組合の意義もしだいに高まってきました。さらに、電子情報市場化をつうじて、情報および知識の操作をつうじたコントロールも非常に強くなってきています。広い意味での知識労働者、高学歴労働者とか知識産業を中心に働く労働者と、その予備軍としての学生の比重が、非常に高まってきているのです。

だからこそ、大学のなかに電子情報市場化としてのグローバル化、つまりグローバル化そのものが侵入してきているという事態にたいして、大学は今、必死の対応を迫られているのです。高度の研究や、それぞれの大学の個性に合った人材育成をしていかななくてはならない。そのための予算の獲得、資金集め、キャンパスの整備などが必要とされてきています。その結果が、各大学へのコンビニの導入などとして具体的に表れてきているのです。大学生協は、こういう事態を的確にとらえて、対応していかななくてはなりません。そういうことをずっと申し上げてきているつもりですが、それぞれ十分かどうか、皆さんにもよく考えていただきたいと思います。

日本の大学生協のユニークさとそれを生かした実践

そのうえで申し上げたことの最後、第4点ですが、このところ大学生協連本部の国際交流などをつうじて、アメリカ、イギリス・フランス・ドイツを中心にしたヨーロッパ、韓国などアジアの諸国をいろいろと見てきました。その結果、分かってきているのですが、日本の大学生協はそのなかでも非常にユニークなものです。ユニークであることを誇りにしていいと思います。大学における教育と研究を成り立たせていくためには学生支援、学生サービスが非常に重要で、ますますその度合いが強くなってきていますが、そのかなりの部分を、第2次世界大戦後、20世紀後半以降の日本では、協同組合方式でやってきました。こういうところは他の国にはないのです。しかも、協同組合の主体が組合員大衆としての学生でした。今でもその姿勢をわれわれはずっと守ってきています。

そういうユニークさを大事にして、グローバル化の時代に合わせて協同の意味を更新していかななくてはならない。そのうえで、大学にどういう協力ができるか、場合によっては積極的に提案していく。協力は追従ではないということを、ビジョンとアクションプランのなかでも私は言ったつもりです。さらに、そういう取り組みをするためには、大学生協は組織的にも財政的にもしっかり自立していなくてはならないでしょう。きちんとした自立

的運営をしていて、しかもなるべく赤字を出さない財政運営していかないといけない。そのためには、組合員にいろいろな形でどんどん参加してもらわなくてはなりません。そのためにはやはり協同が必要だ、ということになってきます。そういう意味で、協同・協力・自立・参加が螺旋形にだんだん開きながら上昇していくような、好循環をつくり出していかなくてはならない。

それが、ビジョンとアクションプランについて申し上げたことの要点でした。一昨日お話をしたことを4分の1の時間で圧縮しましたので、いろいろと至らない点がありますが、もし何かありましたらあとでご質問いただくとして、とりあえずそのようにご理解いただきたいと思います。

京阪神教職員セミナー当日には、誰が設定してくれたのか分かりませんが、非常にバランスの取れた主題の選び方と、報告者およびパネリストの選び方をしてくれていました。重要な問題が3つ揃っています。私が今、申し上げた議論の延長上で、それらのことを論ずることができるように、仕組んでくれたかのようです。だから、論ずるとどうなるのか、順番に話をしていきたいと思います。

2. 教育のカウンセリング化？

『教職員のための学生対応ハンドブック』（関西学院大学）

まず、「教育のカウンセリング化？」です。これについては、教職員セミナーで、関西学院大学の学生部課長渥美さんが話をしてくれました。その要点は、関西学院大学学生部学生支援センターが『教職員のための学生対応ハンドブック』をつくった、というものでした。その時に頂いたのがこれですが、これを見てかなりショックを受けた先生もいらっしやったようです。私もある意味ではたいへんショックを受けました。その内容ですが、関西学院大学1万8千人の学生のうち、約1千名くらいがカウンセリングを受けざるをえない状態にある。それを担当している人たちが、学生部や学生課の依頼を受けて、カウンセリングとはどういうものなのか、じつはそれは、今の大学で学生に対応するときにわれわれ教員が誰でもやらなくてはいけないことなのだ、ということを書いてくれているのです。

まず、カウンセリングマインドを持たなくてはいけない。学生にたいしてカウンセリングをするときには、そういう精神を持たなくてはいけない。それを具体化する意味で、相談にあたるポイントがあげられています。これもたいへん適切だと思います。相手を尊重する、共感する、聞き手に徹して聞き上手になる、問題を確認しながらゆっくりと対応していく、解決法の提案は細かく丁寧かつ具体的にやっていく、そういうことをつうじて、原因に気づかせて分析させる、そのうえで自己決定を促す、そのためにほどよい距離を維持する。また、カウンセラー自身が1人で抱え込まない。カウンセラーが特定の学生と対応する時に、自分だけで問題を抱え込んでしまい、かえって共倒れのようにになってしまう可能性もあります。これは避けなくてはなりませんから、カウンセラーの限界を自覚してお互いに連携する必要がある。このようなことが書かれています。

精神分析の民主化とも言えるような大学教育の変化

これは素晴らしいことですね。われわれが学生に対応するときの基本的な心構えを教え

てくれていると言ってもいい。例えば、私は社会学が専門で、現代に至る社会理論の発展を、自分の専門分野の1つにしてきました。そのなかで非常に大きな役割を占めざるをえないものに精神分析があり、これは学問であると同時に人間治療の療法でもあります。それには、セックスのことばかり考えると、権威主義的であるとかいう限界がつきまとうていたわけですが、それを大きく民主化するようなやり方です。考えてみると、こういうふうに教育ができれば理想なのではないか、と思われるようなことを言っている。

これは例えば、何百人もを相手にする大教室、あるいは何十人であっても、講義の形ではかなり難しいことでしょう。しかし、もしゼミの人数がそれほど多くなければ——といっても、私も、10人以内に抑えたいところを、どうしても20人くらい引き受けさせられてしまう場合が多いのですが——、ゼミの人数が適度であれば、そういう教育のやり方が非常に良いのではないか、というようなやり方です。

皆さんも感じてらっしゃると思いますが、この数十年の過程で、大学教育の意味が大きく変わってきました。私の学生の頃の大学教育は、専門知識を教えながら自ら考え、問題を解決していく方法を身につけさせていく、というものだったと思います。私が学んだ大学では、先生たちはそれぞれ自分の研究しているテーマについて、最先端のことを話す。学生が分かるがわかるまいが、話す。分からなかったら質問に来い、という姿勢です。あとは、学生がそれに刺激を受けたり、あるいは先生に甘く見られたくないので勉強をして、先生に食いついていったりして、どんどん成長していく。そういうやり方でした。

今の大学は、残念ながら、もはやそういうところではありません。その代わりに、大人になりきれていない学生たちに、自らを発見させ、問題に気づかせて、主体的に解決していく、というやり方を身につけさせる。一生続けられるようなやり方で身につけさせることが、じつは本当のキャリア形成というものでしょう。文部科学省が言い出して生協もそれなりに協力しているキャリア形成は、会社などの選び方とか就職活動の仕方などを教えるという面だけが強調されているくらいがあります。その前提として、主体性を養うキャリア形成をやらざるをえない状態になってきているのです。

少子高齢化による成熟の緩慢化に大学が対応し切れていない

なぜ、このようなことが必要になってきたか。私は前から言っていますが、長寿化の結果の1つとして、人間の発達過程が長い人生に合わせてスローダウンしてきたのです。だから、例えば50年前の学生と今の学生とでは、同じ年齢でも発達段階が違う。しかも、社会がそれに対応したシステムをつくっていないので、スローなペースでやろうとして社会の教育システムとうまく合わず、脇道にそれてしまっ、先を見失ってしまう学生が非常に多くなってきているのです。

それが基本にあって、日本では学歴社会と少子化の相乗作用が1980年代以降急速に働きました。その結果、例えば教育ママとマザコン学生の相互作用で、学生が萎縮してしまっている。それから、共働き夫婦も増加して、良い意味で学生が自立していけばいいのですが、自立しかねていろんな問題を起してしまう場合も多くなっている。さらには、大学進学率が上昇して、大学教育がユニバーサル化してきました。いろいろな学生が入学してきます。それに社会あるいは大学のシステムが対応しきれていない。こういうことから生じてきた現象です。

これは根本的には、社会の世代更新の機能不全だと思います。社会は、世代更新をしつかりと行なわないと、いつか消えてしまいます。すべての人間に寿命がありますから、世代更新は不可欠なものです。その世代更新が機能不全に陥っています。これを世界的に見ると、早熟的に豊かになりすぎた社会の矛盾の1つと言っていいと思います。

典型的には、パラサイトシングル問題というのがある。これはどうも日本だけではなく、一部イタリアなどの南欧社会、あるいは韓国にもありそうな話なので、日本独自の現象だと思ひ込むのはよくなさそうです。親に経済力があるものだから、子どもを手元から離したがる。そのために、子どもが就職して働いているのに自立しない。途上国ではそんなことはないだろうと思っていたのですが、一人っ子政策を取ってきた中国などではやはり同じような問題が起こり始めているようです。

グローバル化を経済から社会文化の諸領域に広げていく

そういうことを踏まえて、学生世代が教育というよりもカウンセリングの対象になるような事態が、出てきているのです。これに対抗する1つの方法は、グローバル化を経済から社会や文化に広げていくことです。つまり、先進国の若者の問題を先進国だけで解決しようとしても限界があるので、途上国の若者たちともっとミックスさせる。そういうことをこれからは考えていかざるをえない。豊かな社会の少子高齢化というのは、その意味でヘーゲルの用語を使うと歴史の狡智の1つなのではないか、と私は思っています。

日本もそうですし、ドイツは典型的にそうですが、外国から若い世代を入れないと社会が回転していかない、という状態になってきています。だから、入れざるをえないのです。そういう形で、つまりある国民を基礎に国民国家をつかって、そのなかで相互連関的に教育や福祉のシステムなどをつくらうとしてきた今までのやり方が、通じなくなっているのです。だから、日本を思いきって世界に解放し、外国の若者をどんどん入れなくてはいけない。それと同時に、日本の若者もどんどん外に出す。そういうことをこれからはやっていかなくてははいけないのではないかと。

ただ、その前に学生がもっときちん身体をつくっていてくれないと、外にも出て行けないし、外部からやってきたいろいろな国、いろいろな人種や民族の学生にも対応しきれないだろうと思います。それで、私はつぎに、身体形成、英語で表現すると **body building**、つまりボディビルのお話をしようと思います。一般的なボディビルとは意味がずいぶん違うので、よくお聞きいただきたいと思います。

3. 食の面から身体形成を革新する

食生活管理・生活管理のできない学生たち

一昨日の2番目のパネリストの飯田さんが、「大学生協の食生活相談から」というたいへん面白い問題提起をしてくれました。これはもう、私などが繰り返さなくても、多くの先生方や生協職員の方は気がついていることだと思います。今の学生たちの多くは自分の食生活管理ができない。その原因に、規則正しく就寝して起床することもできないということもある。つまり生活管理ができていない。そういう学生たちが増えているということです。飯田さんが、そのことを、非常に具体的なケースをあげて説明してくださいま

した。私自身は、そういう具体例についてはあまり得意ではありません。飯田さんの当日の話のパワーポイントがセミナーノートに載っていますので、それなどをご覧いただければと思います。そんなところまでいっているのか、と思うような話がいろいろとありました。

私の頭に残っている例を1つだけあげると、例えば500円以内でその日の食事をしなくてはいけないとき、とにかくお腹をいっぱいにするだけを考えて、栄養のことはまるで考えない。だから、牛乳とパンならまだしも、量が多いからと2リットルの水を買ってしまう、という話です。結果として、それでお腹が膨れて、そのときは何とかなっているのですが、身体をつくることにはなっていない。このような話をいろいろとしてくださいました。

電子情報市場化にともなう相対的貧困化

これはどういうことなのか。自分が基調講演をやった責任上、その文脈ではどういう意味を持つのか、いろいろ考えさせられました。まずこれは、電子情報市場化といいましたが、それに伴う相対的貧困化とっていいのではないかと思います。これはどういうことかという、先ほども言ったように、電子情報市場化を基礎にして世界に広がった生政治的生産のシステムが、簡便な食、簡便な衣、簡便な住、簡便なセックス、安易な移動、安易なコミュニケーションでわれわれの身体を軽くしている。

そこに、学生の側からする資金配分の問題が関わってくる。学生にとっていちばん重要なのは何か。携帯が大切で、持っているだけではなくて、使うとお金がかかるわけですから、それを維持し続けるということが非常に重要です。つまり食、衣、住、性、移動、コミュニケーションという順番で資金を割いていかななくてはならないはずなのが、逆になくなってしまっていて、コミュニケーション手段のためにお金をかけなくてはならないから、食にたいするお金が不足するという結果になっている。

携帯、旅行、交際、ファッションなどといった、序列からいうとむしろあとに回されるべきもの、ミクロ経済学的にいうと限界効用の低いものにさきにお金が回されて、高いものが後回しにされるため、結果として食が疎かになるという事態が起きている。だから、エンゲル係数などというものがあまり意味を持たなくなってきており、空洞化してきているのです。

つまり、学生たちは、栄養計算ができないだけでなく、長期的なパースペクティブで身体形成ができていない。若いから今は多少無理してもすぐに影響は現れないわけですが、もっと長い展望で見て、今身体をちゃんとおくることがいかに重要かということを理解していない。その背景としては、もともと長期的展望などないか、意味を持たない、ということがあるのかもしれない。つまり、ビジョンとアクションプランなどというものを持っていない。初めに申し上げたように、持たなくてもいいのだと思い込まされて育ってきているのかもしれない。

戦前ファシズムの身体形成から現在の新帝國的な身体形成にいたるまで

そういうものを自分で持っていないということは、実際には、何か、誰かが用意したものに乗っかっているはず。そのことに気がついていないだけです。どうしてこんなことになってきたのかを考えると、私はあらためて、新帝國的な身体形成ということを強調せざ

るをえません。電子情報市場化によって消費文化が再編され、グローバル化してくるとい
いました。それを具体的にいうと、今言ったように、食、衣、住、性、動、信——信とは
コミュニケーションのことですが——をつうじた軽い身体形成がおこなわれてきている、
ということです。くり返しますが、軽いという意味は電子情報市場的に操作しやすいとい
う意味で、自分は体重があるから軽くはないということで済まされる話ではありません。

これに関連して、日本とアメリカを中心に、どういう経過でそういうことが進んできた
のかを、少したどっておきたいと思います。1920-30年代のファシズムはまだ古く、伝統
主義的で家族主義的で権威主義的であるような身体を、出始めたばかりのマスメディア、
つまりラジオとか映画とか大衆集会とかいうもので情報操作して成り立ったものでした。
例えば、ドイツのナチズムは、ドイツに根付いていた家族主義的権威主義を、このような
マスメディアでうまく操作しつつヒトラーの独裁を受け入れさせて成り立ったものでした。
そういう社会学的研究がいろいろあります。

第二次世界大戦後 1950-60年代の大衆社会における身体形成は、アメリカの場合には私
のいう意味での軽い身体にかなり近づいていましたが、日本ではまだ半ば以上古い身体を
めぐるって行われていました。高度成長のプロセスです。それが 70-80年代の豊かな社会に
なってくると、日本にもアメリカ的な消費文化が浸透してくる。その際の先兵はつねにコ
カコーラです。これは世界中どこでもそうでした。そこにやがてマクドナルドに代表され
るようなファーストフードが入ってくる。その刺激を受けて日本的にもファミレス文化の
ようなものが広がる。これはアメリカ的なものと日本的なものとの折衷で、それなりにい
い面もあって、生協もそこからいろいろ学んだ面もあるという話を聞きました。

それから 90年代、さらに 2000年代になり、格差社会に向かってくる途中で、一時は日
本経済の調子が良かったこともあり、グルメブームなどが広まりました。しかし、バブル
が崩壊するといわゆる価格破壊が起きて、それが価格だけではなく労働力にまで広まって
いきました。「賃金破壊」が起これ、雇用システムが破壊されてきます。両性間の雇用機会
均等化は法律である程度進みましたが、並行してパート労働が増加し、フリーターが増加
し、派遣労働が増加するという具合になってきました。

年齢格差を利用した国内植民地づくりと食文化の脱コード化

この過程で、いわば最新版の国内植民地主義が現れます。国内植民地主義（インターナ
ル・コロニアリズム）というのは、決して私が勝手に作り出した言葉ではなくて、1960-70
年代から世界的に学会で用いられてきている言葉です。どういうことかという、グロー
バル化にともなう激しい国際競争のなか、国外に植民地をつくるなどということはもちろ
ん不可能です。しかし、日本のような社会では、アメリカなどの場合と違って、その内部
に人種、民族的な対立というのがはっきり目に見える形ではありませぬので、
それらを利用することも困難です。そこで、年齢格差を利用した植民地づくりが行われま
した。

中高年にたいしては、いわゆる窓際族という言葉がはやりだした時期から、やがてあら
ゆる企業でリストラ旋風が吹き荒れていく過程で、行われてきたことです。また、青年に
たいしては、若者文化が普及してきて、フリーターなどは最初は若者文化の1つでした。
豊かな社会では若者文化ですんだことなのですが、やがてそういうものに乗かって雇用

形態を自由化するということが行われ始めました。派遣労働が典型的にそうでしょう。「失われた10年」という事態のなかで、日本は、日本の雇用システムなどにこだわっているからだめなのだ、若者も望んでいることなのだから、雇用形態をもっと自由にしないでだめなのだ、というふうにご利用されたのです。

その結果として、しばらく前から問題になっていますけれども、一生懸命働いているのに年収200万にもならないような、しかももう30歳をすぎているような人たちが出てくる。ワーキングプアと呼ばれたりしていますが、そういう社会になってきました。

こうした過程で、食文化も変わってきたのです。食生活の面からする文化の脱コード化が行われ、アメリカ的な食文化が植え付けられ始めました。戦後になっても、日本はまだ、日本なりのまとまった食事の伝統を持っていました。それにたいして、「牛乳は栄養があるから」というあたりはまではまだよかったです、やがてコカコーラがやってきました。コカコーラが日本に侵入してきたときの宣伝文句を、私はいまだに忘れえないういいます。「ドリンク コカコーラ」。英語の特徴で、命令形だからといってとくに威張っているというわけでもないのですが、われわれが聞くと「コカコーラを飲め」といっているように聞こえます。そのように、アメリカ的食文化は入ってきたのです。

食・衣・住・性・動・信の逆転に食の再位置づけで対抗する

それに続いてマクドナルドも入ってきました。それらが、食生活の面からする文化の脱コード化のきっかけです。それらの浸透にたいして日本の食文化も抵抗してきていますから、そう簡単に乗っ取られたわけではありませんが、しかし内部構成から見るともうかなり深いところまで浸透してきてしまっていて、日本の食文化のバランスは崩されてしまっています。こうして、ファーストフード文化が広がってきました。

ファーストフード文化が広がると、多く的人是に肥満になります。アメリカではその状況が今でも続いています。日本でもその状況が現れました。しかし、ここが今日のポイントなのですが、日本では肥満が広がり、定着するまえに、情報化が進み、とくに若者たちのあいだではそれがケータイ文化として普及してきて、先ほど述べたように食・衣・住・性・動・信の序列の転倒が起こり、ケータイ文化に巻き込まれて食生活管理や生活管理のできない学生たちが増えてきてしまった、ということなのではないかと思うのです。

その意味で、食生活管理およびそれを基礎にした生活管理をしっかりと行い、バランスの取れた、体力ある身体を形成していくことは、それ自体で、今の世界を覆っている新帝國的な身体支配システム、およびそれによるバイオポリティカルプロダクションに対抗する最大の活動なのです。だから生協、とくに大学生協としては、食というものをしっかりと位置づけ、力を入れて取り組んでいかななくてはいけない、というふうに飯田さんの話を聞いていて思いました。

大学生協のトップレベルの職員のなかにも、食堂はじつはあまり儲からない、ということを書いてくれる人がいます。それはそうだろうと思います。手をかけるわりには、利益が上がるという部門ではないかもしれない。しかしそこにやはり、第二次世界大戦後、生協が大学のなかで根をすえてやってきた一番の基礎があったはずなので、大学生協はそこを大事にしていかななくてはいけないと思います。それを中心にして協同を考え、その基礎のうえにより大きな協同、さらに「協同・協力・自立・参加の好循環」をのせていくこと

が必要だろうと思います。

4. チームづくりとしての協同を手がかりに

マジメだがアタマは硬い最近の学生

その手がかりとして、つぎに、チームづくりとしての協同ということを考えてと思います。一昨日の3番目のパネリスト鷺嶺さんの報告に即して、今申し上げたような事態をどう乗り越えていったらいいかを考えたい。食の話からはちょっと離れますが、鷺嶺さんはPC総合サポートという事業の指導をしてらっしゃって、その面から学生を見ていて、つぎのようにおっしゃいます。

「最近の学生は、とてもまじめだけれど、頭が固い。発想が貧困だ」が第1点。そのうえで2番目に、「人との関わりでいくと、仲良しではあるが、深入りはしない。本音は別のところ」と言います。非常に鋭い観察だと思います。どうしてそういうふうになってきたのか。

私の話に引き寄せていうと、これも電子情報市場化の影響です。電卓の普及の結果、計算、とくに暗算はしない。われわれ自身もそうになってしまいました。すぐに電卓に頼る。そういう傾向が子供だけではなく、大人にも広がっています。また、コンピュータや電子辞書の普及の結果、文字、とくに漢字や横文字を手書きしない。これも大人にも広まってしまっていますけれども、何かというときにすぐにパソコンに頼って、ポンと叩けば漢字が出てくる。そしてしばしば、漢字の種類を間違えたりしている。

それから辞書についても、私もまだ大学教育の現場にいますが、ほとんどの学生が使うのは電子辞書です。だから、本の形になっている辞書の使い方を知らない。「アイウ順」とはどういうことか、「ABC順」とはどういうことか、正確には分かっていない。正直に言って私も、ロシア語や韓国語の辞書のひき方はしばらく間があくと手間取ったりしています。ロシア語のアルファベットや韓国語のカナダラマバサなどを、しばらくやらないと忘れてしまっていたりするからです。学生も、大学に来るまえに教えられているはずですが、ほとんど使えないという状態になっている。

また、調べものはすべて、インターネットで機械的に検索します。パッと出てきた画面を誰が出しているのか、そういうことには関心を払わない。したがって、情報の信憑性にも関心がない。私はゼミのときに、その画面を誰が出しているのか、いちいち必ず確認しろと言います。でもなかなかそれができない。たしかに、うまくできない場合が多くなっているのも事実です。だからそういう意味では、いわゆるメディア・リテラシー教育がもっと必要です。メディア・リテラシー教育は、もともとは、テレビなどを見て、それに簡単に振り回されないように、ということで始まったのですが、今やパソコンでのインターネットの使い方などまで含めて、バッチリやらないとだめな状態になっている。

ブリコラージュができず、本音のあるなしが不明な大学生

要するに、何ができないかという、本当にクリエイティブなことができないのです。皆さんは、レヴィーストローズという人類学者がいったブリコラージュというのをご存知でしょうか。アマゾンの森林地帯に住んでいる、未開とか原始とかいわれるような人たちが、

何か問題が生じたとき、自分の知恵で何とかする。知恵を用いてあり合わせのもので何とかしてしまうのがブリコラージュです。だから日曜大工などもブリコラージュという。われわれの生活のなかでは、そういうことをすることが非常に大事な役割を果たしてきました。そういうことをしなくなっているのです。必要なものは何でもコンビニやスーパーで買える。実際には買えないものがたくさんあるのですが、そう思っていて工夫をしない。そういう時代になってしまっています。

それから鷺嶺さんがいったもう1つのこと、つまり「仲良しではあるが深入りはしない、本音は別のところ」というのも、なかなか深刻な話です。電子情報市場化によって、ある意味ではアメリカ的な個人主義が普及してきました。戦後まもない時期、私が学生で社会学を学び始めたころ、ベストセラーの1つとして、もう亡くなりましたがリースマンという社会学者の、「孤独な群集」というたいへん魅力的なタイトルの本がありました。第二次世界大戦後1940年代の後半から50年代にかけて、アメリカの一般の人たちがどんな生き方をしていたのかを、扱った本です。

「孤独な群集」という言い方、みなさんお分かりでしょうか。つまり、アメリカ人は、行ってご覧になって感じた人も多いと思いますけれども、何も知らないで歩いていると「ハーイ」などと声をかけてくる。たいへん人懐っこくて、表面のあたりはいい。しかし、実際にもっと深く人間関係を築こうとすると、閉ざしてしまう人が多いといわれています。本音は別のところにある？ 本当に別のところにあるのだろうか。あればまだいい、と思います。実はないのかもしれない、ということが私の心配なのです。

同じことが心配になるほど、今の学生の文化は、食文化に限らず、深刻な事態になっている。そういうなかで、鷺嶺さんたちがPC総合サポート——PCSSといっていたと思いますが——を通じて協同を起こす。彼女はそれを協同とは言ってなくて、そう思ってもいないのかもしれないのですが、私は話を聞いてこれぞ協同なのではないかと思うのです。例えば、彼女は、仲良し集団はただの仲良し集団ではだめなので、それを本当のチームにしていかななくてはいけないという。そのためには、目的を共有してお互いの存在価値を尊重しあわないといけない。その上で、それをチームにしていくときの、契機というかモーメントがいくつかあって、他人事、人ごととしてではなくて自分ごととして考えて、つまり人の問題であっても人ごととしてではなくて自分ごととして考えて、全員で解決する。そのためにみんなで必死に考える、ということです。みんなで必死に考える。これぞ本当の社会的ブリコラージュだと私は思います。

社会的ブリコラージュを復活させて本音を創りだしていく

そういうことを大学の中で復活しようとしている。しかもそれを、就職活動やOBとの関係を通じて、大学の外にも広げようとしている。協同を広げることです。その過程で彼女は、何事かを進めるためにみんなを引っばっていくときには、バランス感覚が非常に大事だと言っています。リーダーは最初からいるものではなくて、育てるものだとも言っている。これも素晴らしいですね。社会学者としての私には、一言もありません。それぐらい大事なことです。

バランス感覚が必要とか、リーダーは育てるものとかいうのは、これからの生協の専従職員にとっても非常に耳の痛い話であろうと思います。いろいろなところでいろいろな問

題が起こっているのを私も聞いておりますが、大学の生協の中でもそんなにうまくいっているようなことではない。人間の社会ですからやむを得ない場合もありますが、そういうことを、学生たちを、PC総合サポートをつうじて育てながら、言っている。これは素晴らしい試みであると思います。白石さんの話がベストセラーになって全国的に有名になりましたが、内容的にはそれをはるかに超えるような試みです。

さきほど本音は本当にあるのだろうかといいましたが、本音というものはあるものではなくて作るものなのだろうと思います。これも、われわれの社会理論や哲学の分野でいうと、ちょっと難しい言葉を使いますが、本質主義ではなくて、実践を踏まえた構築主義が本当のあり方なのです。つまり、人間とはこういうものであるというのがまずどこかにあって、その通りにすればそうなるというものではなくて、われわれが現在の事態で活動しながら、人間とは何かを自ら創り出していくのです。

そういう意味で、最近では17世紀のスピノザという哲学者や、梅原猛さんが普及に力を尽くされた日本的なアミニズムなどが、再評価されています。言い出すといろいろ長くなりますが、要するに、何か超越的なものというか、つまり神の意思とか何かそういう遠くにあるものではなくて、日常的なもの、日常生活の中に一番大事なものはあるのです。だから、青い鳥の話で、さんざんいろいろなところを探し回って、実は一番身近なところにあったというもの、それが、人間が探しているものなのだとということです。もっとも大切なものはもっとも身近なところにある。そういうことをわからせてくれている、大変いい例なのではないでしょうか。

現代における人への愛と協同・協力・参加・自立の好循環

こういう協同をいろいろな分野に広げていけないか。さっきの食の分野にも広げていけそうですし、それから読書マラソンなどということに結びつけば、読書の分野にも広げて行けそうな気がします。それから学習、研究の分野、それから学生同士の助け合い、相互扶助としての共済の分野などに広げていけないか。そういう意味で、もう1人の基調講演者の江藤先生が禁煙の話をして、これも生協職員の中で耳の痛い人も大勢いたと思いますが、自分は禁煙することが大事だということだけを言ったつもりではない、そうではなくて、自分の話を聞いて禁煙をした人が他の人に禁煙をさせる、つまりほかの人の身になって考えて「やっぱりタバコはやめたほうがいいんじゃないか」といって親身になってやめさせる、そっちのほうが大事なのだとおっしゃった。

それは人に対するまさに愛です。愛というのは非常にきざな言葉ですけれども、それが実感をおびてくる。ついでに、私の大学はカトリック大学で「知と愛 *veritas et caritas*」をモットーにしていますが、その意味がすこしわかったような気がします。そういう意味の活動だと思います。こうして協同の輪を広げていくことによって、最初に申し上げたように教育のカウンセリング化ともいべき事態に直面している大学のなかで、生協は何ができるのか、どういう教育ができるのか、を考えていく。

そのためにも、生協は自立しなくてははいけません。食の問題をやってくれた飯田さんも、そのタイトルで「組合員1人1人の食の自立」といっている。食の自立から始めて1人1人が自立すると同時に、生協の組織もちゃんと自立することが必要です。生協としては、組織的財政的に原則を守って、自立していかななくてははいけません。そのためにも、組合員の

人たちにもっともっと参加してもらおう。そしてそれが、知らず知らずのうちに協同になっていく。それで、協同、協力、自立、参加の好循環へとつながっていく。そういうふうにならなくてはいけないのではないかと思います。

そういうことを、一昨日の3人のパネリストの話を手がかりにさせていただいて、私の得意の、視野が広く論理一貫的な話の、具体的展開として皆さまに話させていただきました。ちょっと時間が超過したかもしれません。長い間のご清聴、どうもありがとうございました。

(070723 京滋・奈良理事長会議での講演、071117 最終稿完成)